

持続可能な「ふくし社会」を創る ふくし・マイスター News

■中部地域COC事業採択校「学生交流会」で報告！

中部地区を中心とした文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の採択校では、各大学がそれぞれの特色を生かし、情報交換を行いながら、地域と連携した諸活動に取り組んでいます。3月1日(水)、これらの大学の学生による成果発表会が開催され、日本福祉大学からは、社会福祉学部「地域研究プロジェクト」の認知症啓発プロジェクト(指導:齊藤雅茂社会福祉学部准教授)を履修する4名の学生が大学を代表して、日頃の活動成果を報告しました。



高齢化に伴い認知症の数は増えているが、認知症の正しい理解や接し方についてはまだ広く知られていないと考えた学生たちは、公益社団法人認知症の人と家族の会愛知県支部と連携して、新たに子ども向けに認知症啓発紙芝居を作成し、各所で公演をしてきました。報告の中で、公演の内容をデモンストレーションをすると、会場の多くの聴衆が関心を示していました。質疑応答では、紙芝居製作において工夫した点を聞かれ、「子どもたちにわかりやすくかつ偏見が生まれないように正しく知識を伝えることが難しく、プロジェクトを履修する他のメンバーに何度もアドバイスを求めてきた」と回答していました。



その後のポスターセッションでは、他大学の学生や教職員などから積極的に質問を受けていました。日頃から地域で活動する他大学の学生との交流を通して、大変刺激を受けたようです。(全学教育センター中野)



参加大学: 中部大学、名古屋学院大学、金沢工業大学、四日市大学、信州大学、静岡県立大学、富山県立大学、福井大学、滋賀県立大学、香川大学(特別参加)、岐阜大学、日本福祉大学(計12校)

■全学教育センター主催「ふくしAWARD」でプレゼンテーション

ふくしAWARDは、大学の授業や課外活動で学んだことについて、プレゼンテーション能力・ICT活用能力を基礎にしてお互いの学びを「表現」し合う、全学部の学生が対象のプレゼンテーションコンテストです。2016年度のテーマは、「地域に根ざし、世界をみざす「ふくし」の学びを伝えよう！」で、日本語部門と英語部門から、44作品の応募がありました。

2017年1月24日(火)、「ふくしAWARD 2016」が開催され、一次審査を経て最終審査に残った8作品(日本語部門4作品、英語部門4作品)のプレゼンテーションが行われました。1グループの発表後には審査員を務める教員からの質問があります。英語部門の発表者は、発表だけでなく質疑応答にも英語で応じ、メンバーで協力して堂々と回答していました。一般公開もしており、地域の参加者の方からは、感想や応援メッセージをいただきました。



「1年生でもしっかりしたプレゼンテーションで驚いた。更なる向上を目指すには、発表を楽しむことと内容のレベルアップが要である。」との講評する全学教育センター長の中村信次教授



社会福祉学部

「認知症啓発プロジェクト」認知症啓発紙芝居を読み聞かせ！！



東海市アビタ荒尾店で、公益社団法人認知症の人と家族の会の啓発イベントで紙芝居を公演

「認知症啓発プロジェクト(指導教員:齊藤雅茂社会福祉学部准教授)」は、公益社団法人認知症の人と家族の会愛知県支部(以下、家族会)と連携して、子どもたちへの啓発を目的とした子ども向けの紙芝居を制作し、2016年9月11日(日)にアビタ東海荒尾店で披露しました。紙芝居を制作したメンバーやプロジェクトに加わる学生7人は早朝8時15分に店舗に集まり、会場設営を手伝いました。作り上げた紙芝居は、「ぼくのおいちゃんどうしたの?」というテーマで、おいちゃんが季節外れの服装をしたり、食事をした直後に再び食事をとりたいと言いついた時の対応などを解説していく内容となっています。この日は6回上演され、およそ150人が紙芝居を楽しみました。(学園広報室)

健康科学部

半田市亀崎地区の景観保全で地域に貢献。

半田市亀崎地区におけるエアコン室外機カバー製作のプロジェクトにバリアフリー専修の学生が参加しました。建築を学ぶ学生にとっては、住民の方からのヒアリング → 設計 → 材料の選定 → 加工 → 設置といった一連のプロセスを体験でき、建築の流れを学べる取り組みとなりました。また、学生の取り組みを通じて、亀崎のまちの景観を向上させることになりました。設置を行った3軒のお宅の住民の方には、大変喜ばれ、学生にとっても約半年の取り組みが報われた瞬間だったようです。(Cラボ半田池脇)



地域の方と設置の記念写真

社会福祉学部

NPO35団体の担当者前でサービスラーニング中間報告会！



団体での活動を通して、得られた気付きや学びを報告する学生グループ

10月14日(金)、地域福祉コースの社会福祉基礎演習の講義に、活動先のNPOの担当者に来ていただきサービスラーニング中間報告会が開催されました。サービスラーニングは、NPOの現場のニーズに応える活動を行い、その体験から学ぶ教育プログラムです。学生たちは、グループに分かれて、夏休みの活動を行ったNPOについてまとめ、団体の課題を見つけ、それに対して何をおこなったか、そこから何を学んだのかについて報告しました。学生は、活動先での失敗や成功体験から学んだことや、NPOの代表や職員だけでなく、NPOの利用者との出会いやコミュニケーションを通して、気づいたことを素直な言葉で表現していました。今年度は、知多半島のNPO35団体に協力をいただきプログラムが実現しました。(全学教育センター中野)

子ども発達学部

地域の子どもとランタンづくり



10月13日(木)、子ども発達学部江村ゼミと美浜町で夫婦で営む造形教室アトリエカラフルとが合同企画を開催しました。この日は、子ども発達学部江村和彦ゼミの2・3年生が7名と2歳児から小学2年生の10名がCラボ美浜に集合しました。前回は参加した子どもの中には、学生のニックネームを覚えて顔を見るなり飛びついていく子もいました。厚紙の箱にクレヨンで絵を描いて、白い葉っぱを貼ってから青色の絵具を全面に塗ります。子どもたちは、学生に見守ってもらいながら、ランタンを作り終え、暗くなった図書館下の階段でオレンジ色の電気をいれて完成を喜び合いました。(Cラボ美浜廣澤)

社会福祉学部

地域と連携！東海キャンパス祭

東海キャンパスは地域に開かれた“参加型”のキャンパスをコンセプトとしています。10月29日(土)、2回目となるキャンパス祭のテーマは「挑戦者(よみ:チャレンジャー)」。お祭りに関する全てのメンバーが何事に対しても挑戦者という気持ちをもって取り組もうとする思いや、2年目を迎えたキャンパスで学生たちが地域と様々なことに挑戦・行動していく決意が込められています。当日は、学生による模擬店や子ども向け企画、ステージ発表のほか、看護学部企画の献血・骨髄バンク登録会が、今回は地元・東海市太田コミュニティと共催で実施されました。今年度発足した学生組織「東海キャンパス災害ボランティアセンター」による、防災に関する企画が展示されるなど新たな試みも行われ、キャンパスは学生たちの熱気に包まれました。(学園広報室)



健康科学部 とよたEcoful Townへ。未来の住まいを考えるバスツアー開催



バリアフリーにリフォームした住まいのモデル展示を隈なく見学。

健康科学部福祉工学科バリアフリー専修の学生と教員4名が、「環境共生入門」の授業の一環で、愛知県豊田市にある「とよたEcoful Town」にバスツアーで訪れ、環境と福祉住環境の視点で施設の見学を行いました。とよたEcoful Townは、「ミライのフツーを目指そう」をテーマに、低炭素社会の実現に向けた豊田市の取り組みを”見える化”して、分かりやすく伝える情報発信拠点として、平成24年5月に誕生しました。これまで日本全国だけでなく、世界各国から多くの方が来場しているそうです。学生たちは、都市部から山間地まで広大な市域を持つ豊田市を縮図化した施設内を2つのグループに分かれて、入学からこれまでの間授業の中で習ってきた「環境」や、「福祉住環境」の視点を持って見学を行いました。（全学教育センター中野）

経済学部 知多わ〜くわくらボの企画

2016年12月7日（火）、経済学部1年生科目の「基礎演習Ⅰ」（後藤クラス）の中で、知多市役所市民協働課稲葉耕作氏と、一般社団法人地域問題研究所橋本健太氏を迎えて、知多市で導入が予定されるわ〜くわくマイレージを活用したアイデアコンテストの説明が行われました。この取り組みは、健康づくりの活動や地域活動の参加に対してポイントを付与して、商店街でポイントを活用できるようにすることで、健康・いきがづくりを目指す施策です。後藤ゼミでは、授業内で「ソーシャル・デザイン」についての文献を輪読してきたことから、コンテストは、学んできたことを活かすための実践の場になったようです。（Cラボ東海鈴木）



健康科学部 多職種連携の研究会へ参加

2016年12月24日（土）、岐阜駅前の複合ビルの岐阜シティタワーにおいて、多職種間連携教育(IPE:Inter Professional Education)研修会が行われました。岐阜県内の高校生や他大学を含む大学生、全国から集まった専門職が約100名参加しました。本学からは、社会福祉学部「地域研究プロジェクト」を履修する3名の学生と担当の藤井博之教授、看護学部からは1年生7名と渡邊亜紀子准教授が参加をしました。高校時代に「在宅看護」に興味をもち、看護学部に入學した一年生は、「違う分野の専門職の人や同世代の方の多様な意見を聞いたのがとても刺激になった。これから専門的なことを学んでいくとともに、様々な人とコミュニケーションとれる力を身につけていきたい」と、話をしてくれました。（全学教育センター中野）



ふつうの暮らしをみつめるイチニチ「COC・DAY」3キャンパスでシンポジウム開催



2017年1月25日（水）美浜キャンパスでは「子ども貧困〜地域はどう向き合うか〜」をテーマに開催



2017年1月26日（木）美浜キャンパスでは「半田市の景観とまちづくり」をテーマに開催



2016年12月3日（土）東海キャンパスでは「まちを使いこなすことから、まちを育む」をテーマに開催

COC・DAYは、文部科学省 地(知)の拠点整備事業の採択を受けたCOC事業「持続可能な「ふくし社会」を担う「ふくし・マイスター」の養成」の取組の一環として、各キャンパスにおいて開催されています。「ふくし・マイスター」養成に係る啓発促進と、地域課題の解決に向けた事例共有の場として、地域連携教育推進にむけて、地域関係者・教職員・学生が協働した取組を展開するものです。

日本福祉大学は、「地域に根ざし、世界をみざす『ふくしの総合大学』」として、地域と連携をすることで、教育・研究・社会貢献の取り組みを展開しています。地域の拠点として、3つの「Cラボ」を設置して、地域連携を専門とするコーディネータが学生や教職員の様々な活動を支援しています。

Cラボ東海

地域の人たちを巻き込んで行動していく学生



鈴木有華コーディネータ

国際福祉開発学部卒業生、現在は地域連携コーディネータとしてCラボ東海、東海キャンパスコミュニティラウンジで勤務している鈴木有華です。東海ハンガアウトや演奏つき絵本読み聞かせ会など学生が企画し、地域の人たちを巻き込みながら行うイベント等、地域と大学をつなげる取り組みのお手伝いをさせていただいています。地域の人たちを巻き込んで行動していく学生のみなさんの姿にたくさんの刺激を受けています。(鈴木)



学生のアイデアで一年を漢字一文字で表す企画を実施。

自分たちができることを活かして少しずつ実行する！



知多半田駅前円卓会議で市長の前で政策提言をするはんだU22研究所のメンバーたち

半田の中心市街地では「はんだU22研究所」や亀崎地区の「フィールドワーク」や「エアコン室外機カバー」を中心として、この一年で様々な活動が生まれました。それに伴って自分の住むまち、学ぶまちを考える学生が増えてきたと感じています。

今後も、学生自身が自分たちができることを活かして、少しずつ実行することで、まちが徐々にいい方向へ変化していくことを体験を通じて感じ取ってほしいと思います。半田エリアの地域活動の相談は、Cラボ半田まで。(池脇)



池脇啓太コーディネータ(右)と名倉弘二コーディネータ(左)

Cラボ美浜

人と出会い地域でふれあうことが財産。



廣澤節子コーディネータ

四季を一巡してCラボ美浜で春を感じるこの頃、人と出会い地域で触れ合うことが学生にとってなよりの財産と良く思うことがあります。この一年、美浜町図書館でのピブリオバトル講座を受けた学生が野間小学校の先生と講座で出会い、模擬授業をするまで繋がりました。また、商工会青年部と一緒に企画した第2回MIHAMA-Fesでは、実行委員の学生が職場体験ブースや舞台演奏できる団体を自分達の繋がりの中でお願いをし、当日には多くの学生が参加・協力してくれました。当日来場者がおよそ2000人にもなりました。地域で活動できる場が日本福祉大学にはあります。気軽にCラボ美浜まで足を運んでみてください。待っています。(廣澤)



野間小学校の児童25名の前でピブリオバトルの説明を行う学生

ふくし・マイスター

【第2回 MIHAMA F-es～地域の魅力発掘市～開催】

美浜町商工会青年部と、美浜キャンパス学生有志が中心となって実行委員会を組織して、美浜町の魅力を伝える「MIHAMA F-es」が企画されました。地域の商工会メンバーや大学のサークルに声をかけて子ども向けに職業体験企画を実施したところ、子どもから大人まで約2000人の参加しました。おそうじ体験ブースでは、子どもたちが、窓ガラスを汚し掃除道具を使ってきれいにするまでの一連の体験を通して、楽しげにプロの掃除の技を体験していました。他にも、ステージ企画が催され、合奏研究会の学生がステージを盛り上げていました。この日、日本福祉大学からは50名のボランティア参加があり、地域に根ざした活動が展開されていました。(廣澤)



※「ふくし・マイスター」の取り組みと一緒に参加したり、情報を発信したりしてくれる学生を募集しています。Cラボまたは、サービスラーニングセンターまでお気軽にお問合せください。情報を紙面に掲載したい場合もお気軽にご相談ください。

